

第九章 昔の出来事と昔話

1. 草相撲

幕末から明治に掛けて北勢地方のうちでも、三重郡、朝明郡は草相撲の盛んな土地柄であった。秋祭りのシーズンともなれば、村々の鎮守の森に築かれた土俵では、余興として素人相撲大会が催され、優勝者に与えられたのがここに述べる「村名乗り」の四股名である。この四股名を名乗ることが出来る者は、村一番の最強者として何よりの名誉ということになる。神前地区で「村名乗り」の四股名としては、泉州（曾井）、浮舟（高角）、松川（菅原）、神勇（寺方）、三滝川（尾平）があった。

2. 200年前の雨乞い

深刻な旱魃時には、各地で昔ながらの「雨乞い」が行われているが、およそ200年前の江戸時代に、庄屋が雨乞いを願いでたと見られる文書が名古屋市で発見されている。（平成6年7月26日中日新聞掲載）

その文書には、亥年6月に寺方村、佐倉村（現在の桜町）などの庄屋から「山田藤左衛門」

（大庄屋の補佐役）に雨乞いを行うことを届け出たことが記載されており、天明年間(1781～1788)の文書と同時に見つかったことや、山田藤左衛門の生存時期から安永8己亥年(1779)に書かれたものでないかとされている。

寺方村の文書では、「長く照り続き田も枯れ」「6日～10日まで氏神にたてこもり立願したい」など、深刻な日照りを受けて5日間の雨乞いを予定していることが記載されている。

雨ごいの唄：「雨ふれよ、さあふれよ、さあさあふれよ、さあふれよ」と歌いながら太鼓を一晩中たたき祈ったといわれている。



雨乞いの嘆願書

3. 年貢米

戦後の農地解放（昭和23年）が行われるまでは、地主（所有する土地を総べて貸付する）・自作農（自分で所有する土地を自ら耕作する）・小作農（地主より田んぼを借りて米つくりをする）とあった。

小作農家は、収穫した米の半分以上を年貢米として地主に収めることで地主の米倉庫は、不作知らずで米が集まるように^{おきて}綻が作られていた。

昔の小作人は、今では考えられない厳しい環境で農業を続けていたのである。

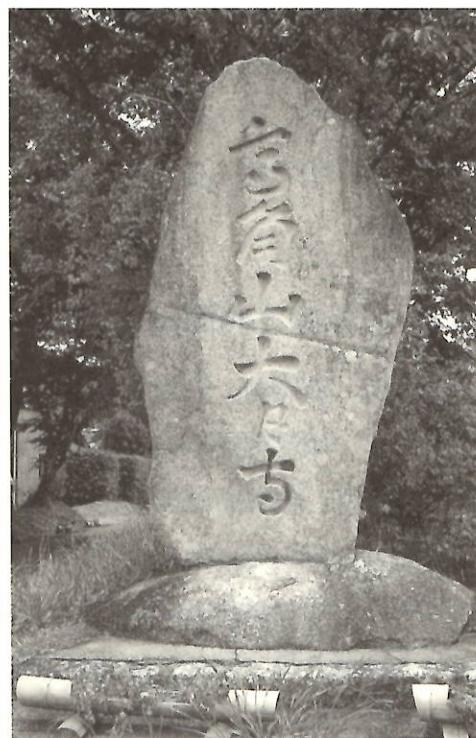
4. 弁慶石（高角山大日寺）

天台宗高角山大日寺の参道の入口に建てられた門碑を、地元では古くから弁慶石と呼んでいる。

この由来は、石の真ん中に左右に渡って縄の跡のようなものがついているからである。

昔、時の大日寺の住職が門碑を自然石で作りたいと考えていたが、費用もなく適当な石も見つからないまま困惑していた。いつしかそのことが総本山の比叡山延暦寺にまで伝わることとなり、この話を聞いた怪力の僧弁慶が門碑にふさわしい石を見つけ、その石を藤縄で縛りはるばる江州から伊勢の国寺方まで背負ってきて、当地に下ろしてみるとなんと藤縄の跡がついていた。

時の住職は、石工に「高角山大日寺」と刻ませた。その後、この門碑を誰がいうともなく「弁慶石」と呼ぶようになった。



弁慶石

5. 龍宮池

龍宮池は、昭和45年に周辺の水田の耕地整理が行われるまでは、面積5町歩の大きな池で寺方町北瀬古地内、十数町歩の水田の重要な灌溉用の池であった。

付近には長谷池等があり、また、御池沼には、天然記念物のさぎ草・柳木類・蘚苔類・白玉千草等が多く繁殖し、日本では一番小さいトンボであるハッチョウトンボの姿がみら

れ、ともに学者の見学などが多い。昭和38年に、米国カトリック系メリノール女子学院高等学校が建設された。

龍宮池の由来には、今も地元に伝わる一つの伝説が残されている。

遠い昔、一人の若者が大池のほとりで茅を刈っていた。ところがにわかに空がかき曇り、あたりの茅がざわつきはじめ、「何だろう」と不審に思った若者が茅を刈る手を休めて前方を見ると、何と唐傘ほども胴体のある斑模様の大蛇が茅の間を通って行くのがみえた。この話は村中に広がり誰も近づかなくなり、田に水を引く者もいなくなった。田んぼは、干しあがり米がとれなくなった。困った村人達は、大蛇が一番恐れるという竜神さんを池に祀ったところ、二度と姿を現さなくなった。地元ではいつしかこの池を「龍宮池」と呼ぶようになった。



龍宮池

6. 寺方村と西野村・高角村の山野論争

寺方村、西野村、高角村は共に藤堂藩領であり、寺方村の南に高角村、西に西野村があり論争は、新田開発が盛んに行われていた元禄期（1688～1703）に生じた。

この時期、藤堂藩でも積極的に新田開発政策がとられた。そのため寺方領内の開発を巡つて隣村でもあった寺方村、西野村、高角村三ヶ村の入会地の問題と、寺方村と西野村との境界をめぐって論争となつた。三村とも藤堂藩領であったので、藩の裁定によって解決を図り、元禄3年（1690）4月郡奉行・加判奉行によって解決をみた。

一、寺方村の村山には西野村、高角村の者の入山を禁止する事。

二、寺方村の一番西にある寺山は三ヶ村の入会地とするが、ここにある松の木は寺方村に遣し、伐採すべきこと。

三、寺方村の北西の野原は、三ヶ村の入会地とするがこの地の松は寺方村が伐採すべきこと。

四、寺方村の北東の地は新開の場所として、希望次第に開発させるが、西野村、高角村の者が開発しても寺方村の新田として帳に記録し、年貢を上納する根入作（地元が年貢を上納し他村がそこに入つて耕作する）にすること。

五、野にある田畠は、四方三間通りと畔刈り分は地主（寺方村）に与えること。野の辺りにある田は、畔刈り稻干場に七間通り地主のもの。

これに違反しないように絵地図を作成し、紛争は収められた。

7. 矢合川の由来

矢合川は、三滝川の支流で高角町地内で三滝川に合流しており、流水は、灌漑用水として利用されている。

桜町垣内に所在した佐倉城において、天文年間(1532～1554)城主小林備前守重則は、北勢の南朝方の守りのため一生吹山に出城を築き、亀山閥一族・峰城主大和守盛定の来攻に備えたが、戦いは苦戦となった。やがて、出城は落城し北方への後退を余儀なくされ、生水川(矢合川の旧名)を挟んで矢を射合う激戦となつたが、健闘空しく負け戦となり、城主は、天文8年(1539)弱冠18歳の若さで自刃して果てた。

その合戦の際、矢合わせをしたところから、その名が矢合川と付けられ、激戦の様子を偲ぶよすがとなつてゐる。



矢合川（西之坪の井堰）



一生吹山

8. 化粧の水

勢陽五鈴遺響、三重郡卷之二によれば、「津藩領・長島藩領入會ナリ曾井ノ名義、本邑ニ和泉式部ノ井泉ト云アリ、故ニ名ク…外宮神領目録曾井御厨…云々」「曾井城址 同處ニアリ文治年間(1185～1189)志村右衛門尉、居住ス…」「村ノ前ニ清泉アリ和泉式部容貌ノ美麗ナルヲ、此井ニ映メ試ミシ故ニ泉井ニ據テ村ノ名ナレリト勢陽雜記ニ載ス…云々」とある。



化粧の水

大江雅致の娘、式部が和泉守道貞に嫁ぎ、そして66代一条院の皇后上東門院に宮仕えした。容貌美女の和泉式部の悩みは、鼻の傍らに黒い痣があることであった。そこでこの痣が消えるよう清水大悲尊に祈願したところ7日目に夢のお告げがあり、それは三重の郷、東光山觀音寺の十一面觀世音菩薩の深い慈悲を仰ぎなさい。そうして甘泉洞に浴して觀音さまの慈悲にあずかるようにといふものであつた。

長保2年(1000)4月、和泉式部は東光山に着き、7日間籠もり觀音菩薩に参籠したところ、靈験を得て痣が消え京都へ帰った。この時曾井民部之助忠安(19代)とその家臣三宅源三郎が式部を守護した。寺にあって詠んだ歌

「夕暮れは なお哀れなり 鳴く蛙 声も細井の水のながれに」

その後、上東門院も觀音菩薩に安産を祈願して靈験があった。そこで一条天皇は深く感じるところあって、寛弘元年(1004)11月東光山を勅願寺とした。こうして子安觀音も祀つてある觀音寺には、化粧の水をいただき安産祈願に訪れる参詣者を多く見かける。

9. ひすい谷

「翡翠谷」について記述したものに東光山袖日誌、保曾井物語がある。

平安の頃、曾井に見事な翡翠の玉かんざしが奉られている東光山觀音寺というお寺があった。觀音寺より少し西方にある大日山の小高い丘の上に、平氏の一族、若菜十郎永貞という武将が城を構えていた。若菜十郎永貞は、常日頃觀音寺の翡翠のかんざしを手に入れることができないものかと、考えていた。

觀音寺の翡翠のかんざしは、一条天皇が唐の玄宗皇帝より贈られた宝物で、妃に仕える女官、和泉式部の顔の痣あざが取れたことを喜ばれて遣わされたものであつたが、式部は凡人の自分の持ち物ではな



ひすい谷

いことを悟り、観音寺に奉納した。

若菜は靈力のある宝物とも知らず、観音寺に火をかけて宝物を奪い去ってしまったが、たちどころに罰が下り奥方が発狂、自分も重病の床に就いたため、深く罪を詫び宝物を寺に返した。

その後、観音寺を中興した道隆禅師が、人間の欲望を起こさせる翡翠を北山の谷に埋蔵され、その後この場所を「ひすい谷」と呼んでいる。

10. やぶ地蔵



やぶ 地蔵

お地蔵さんにまつわる伝説は、古くから日本各地に数多く残されている。また、子供達の世界の中にも童話・童謡などを通してお地蔵さんをテーマにした、ほのぼのと心あたたまる物語や楽しいわらべ唄などが沢山ある。

いわばお地蔵さんは、私達民衆の中に溶け込んだ大変親しみ深い、み仏ではなかろうかと思われる。曾井町にも古くから眼の病気に大変ご利益がある靈験あらたかなお地蔵さんとして、今もなお敬われ、信仰の念をよせられているお地蔵さんがある。この地蔵さんを地元の人々は「やぶ地蔵」と呼んでいる、その名の通り観音寺より少し離れた昼間でも薄暗い竹やぶの中に、笹の間よりわずかに差し込む木漏れ日を受けて、身の丈1メート

ルばかりのお地蔵さんがたたずんでおられる。

永い年月、風雨にさらされてきたためか、目・鼻はほとんど原形をとどめていず、何時の頃、何の目的でここに祀られたのか。地元曾井町に伝わる由来によると、江戸の末期曾井村の観音寺の隣に川村文裁という漢方医が住んでいて、医者を開業する傍ら、隣接する観音寺の寺守も兼ねておられた。観音寺は慈悲深い十一面觀世音菩薩の寺として名高く、その昔、和泉式部の顔の痣がとれたという伝説もある。ある日のこと、はやり目のため文裁さんの治療を受けに訊ねてきた患者が、地蔵菩薩の功徳を熱心に説き、観音寺の境内に眼病にご利益のあるという、お地蔵さんをお祀りする相談を持ちかけた。熱心に説く患者の話に心うごかされた文裁さんは、観音寺に縁のある竹やぶの中に地蔵菩薩を祀られた。

その後、この地蔵菩薩を誰が言うともなく「やぶ地蔵」と呼び、眼の病に大変靈験あら

たかなお地蔵さんだと伝えられ、今日に至るまで人々の信仰の対象仏としてあがめられてきた。

11. 夜泣き石（薬師堂）

永代寺薬師堂境内にあったとされるある石が、何らかの都合で尾平村の大庄屋多田の屋敷の庭に移されていたという。主人は、屋敷の庭を「日成園」と名づけていた。ところが、この「日成園」の一角に置かれていたこの庭石が、ある夜、主人が眠っていると、枕元にきて「薬師さんに帰りたい、薬師さんに帰りたい」と泣きながら訴えた。毎夜のことに気にかかり庭に出て石を見たところ、この石はべトべトに濡れ、まるで泣いたように見えた。このことからこの石を夜泣き石と名づけられたと言われている。その後、寺の住職に相談され薬師堂境内に戻されたという。

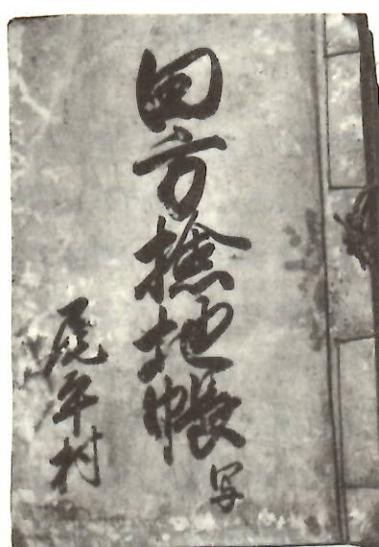
現在は堂の前庭の南に安置され、看板が設置されている。



夜泣き石

12. 田方検地

延宝6年(1678)の田方検地帳。「検地帳」とは、土地台帳のことで耕地面積と収穫高か



田方検地帳

らなる。当地区（伊勢国）は秀吉の命令のもと文禄3年(1594)に、いわゆる太閤検地が行われている。その後、90年経つて新田の開発、藤堂藩独自の平高（ならしだか）（延高）などのため、尾平村では、延宝6年に藤堂藩により検地が再度おこなわれている。

太閤検地帳では、尾平村は五百二十石三斗八升であったが、津藩がこの年測量をしなおしたところ百九十七石三斗七升二合も多くなった。津藩の租税徵収の厳しさがよくわかる。このような検地は、藤堂藩のすべての領地で行われているものと思われ、神前地区でも延宝元年頃から順次行われている。

田方検地帳記載内容 門田壱 (地名、番号)

一、上田 (地味による等級) 壱反弐畝十三歩 (面積)

壱石九斗弐升七合 (石盛、見積もり収穫量) 忠右エ門 (耕作者)

このように、「検地帳」は、一筆ごとに田畠の耕作者（名請人）を調べ、書き上げられている。

13. 谷田上池普請

天保年間、干ばつにより全国的に大飢饉となつた。

尾平村などでも干ばつによる水不足のため不作が続いた。そこで尾平村では多田市左衛門正武・横山幸右エ門等が中心となり、谷田上池建設の工事をすることになった。「天保8年(1837)2月谷田上池普請人夫并入用覚 普請銀并入用共村方江相渡帳」には、池を作るために出動した村人個々の記録とか、〇月〇日何人、〇月〇日何人という記録が残されている。これにより、多くの人々が長き間に渡り、駆り出された事がわかる。この事業は3ヶ年という長い年月を要したという。



谷田池の彰徳碑

総面積……大溜、小溜合わせて 約1,500坪 (池南に彰徳碑あり)

14. 藤堂の殿様 (藩主) 順郷

弘化2年(1845)3月8日殿 (久居藩主藤堂佐渡守高聰) は三重郡へ御巡視。家老三好兵右衛門、奉行谷田嘉左衛門、用心増倉興三太が随行。また、番頭格服部竹介、中老格平松権六も特命によって御伴に加わった。一同は駕籠で儀衛肅々と進む。衣服は殿様始めいずれも、綿服の脚巾掛で、游獵服姿である。津から上野、白子、神戸を経て河原田、中川原、伊倉、久保田、大井手、小生、高角、寺方、曾井を巡られて尾平に御到着された。その間殿は、多く村民の歓迎を受けられた。巡視される処で献米があり、また、御賞賜があったようだ。

その夜は、大庄屋多田市左衛門正武の家に御宿りになった。この家は随分大きいが、御人数残らず入り切らぬので、寺院や庄屋の宅などへ分宿した。

御巡視の三重郡での村数は総てで10ヶ村、神主・寺僧なども献銭した模様。殿からは扇子や菓子などを賜った。翌9日は快晴、早朝尾平を御出発、伊勢街道を経て遠帰還された。

我領土の伊勢圏内に在る分は、四萬石で大庄屋5人が分管している。殿は去年来しばしば御巡視に出られたが、ただ、多田市左衛門正武の管下だけは遠隔の地であるから、なかなか御巡視が済まなかった。それで村民は、皆首を延ばして待っていたのである。

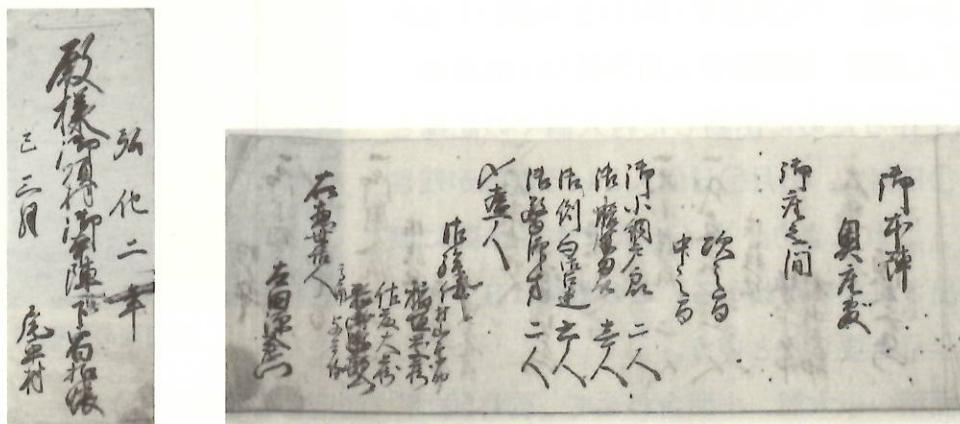
●伊勢久居藩史（藤堂記）三重県郷土資料叢書 梅原三千著「三重郡記行」より

資料：弘化2年(1845)3月

殿様御順村御本陣 并 下宿控帳

御本陣とは、大名とか幕府役人などが宿泊する旅館の事で、この帳面には本陣に宿泊する役人や給仕する人や世話人が記されている。

御本陣、奥屋敷、御座之間、次之間、中之間に殿様の外、御小納戸衆2人、御膳衆1人、御側向御召達6人、御医師方2人、計11人 また、その他用人とかの宿泊間の割当が記されている。



殿様御順村御本陣并下宿控帳

15. 東宮殿下 神前村西野行啓遺蹟

今上陛下（大正天皇）^{ちよきゆう} 儲宮にましませし時、明治45年4月30日参謀演習御覧のため、神前村大字西野東方高地の御野立所に行啓あらせられたり。とあり、大正天皇が皇太子の時、明治45年に県内で実施された参謀演習をご観察されているが、三重郡には4月29日から5月1日の3日間行啓されており、その際、当地の演習も御観察されたのである。

16. 東宮殿下 神前村尾平行啓遺蹟（谷田山）

神前村大字尾平谷田山は、明治45年5月1日、今上陛下（大正天皇）東宮にましませし



ハンノキ

時、陸軍參謀演習御覽のため当地に行啓の節、御野立所に当てさせられたり。後年、村民相謀り山上に皇太子殿下御駐跡、背面に明治45年5月1日演習御覽のための文字を刻せる

石標を建設し、光栄を不朽に伝ふ、殿下の谷田山の御駐駅あらせらるるや、同地に産するハンノキを御鑑賞あらせられ、御還啓後、同樹の高八～九尺のもの拾株を献上せしに、御嘉納あらせたまい、大正元年12月21日金壱百円を下賜せられたり。

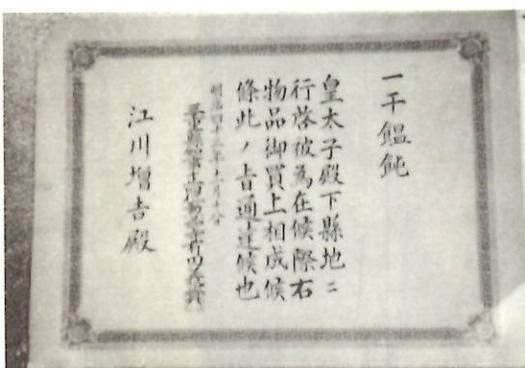
村民、深く之に感謝し、特別会計としてこの恩恵を永く記念せるのみならず、毎年八十円宛を増殖し、5ヶ年計画にて積立金を五百円に達せしめ、公益事業を遂行せんことを企てしが、その後記念農產品評会の収益、村税の剰余金、寄付金等を加へ、5ヶ年間に壱千円に達せしめ、以てその事業を拡大せんと目下計画中なりと記録がある。

現在は、谷田山の往時を偲ぶ資料はほとんど残されていないが、美里ヶ丘造成時に、移転された「皇太子殿下御駐跡」の碑が尾平町の神明神社の東角に通行する人々を見下ろすようにして建てられている。

なお、壱千円については昭和7年神前尋常高等小学校の講堂建設の一部資金として使われている。



皇太子殿下御駐跡石碑



通達された証

干餽飴お買上げ通達

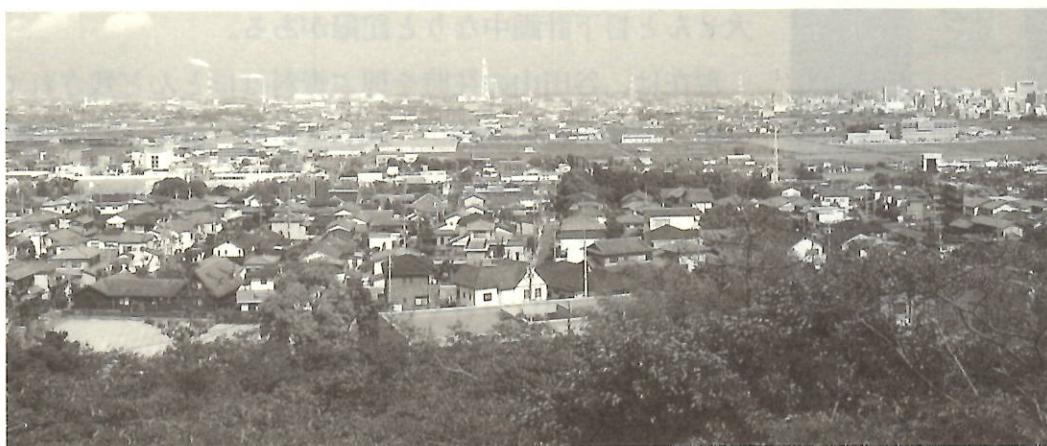
皇太子殿下（大正天皇）が県下に行啓あらせられた際、干餽飴をお買上げになった。この旨を通達する証が三重県知事（正四位勲4等）有田義資名で江川増吉宛にだされている。

（江川義太郎家所蔵）

17. 谷田山 横須賀海軍基地

第二次世界大戦の戦局も激しくなった昭和20年の春、横須賀海軍の基地として、尾平の谷田山に高射砲2門、探照灯2台が設置され、横須賀海軍の兵隊81名が駐留した。当時地区の住民達には、谷田山海軍基地に関する詳細な内容について、軍の機密事項として一切知らされていなかった。戦後になって、始めて公開されたGHQの軍事作戦資料などによれば、第二次世界大戦時、四日市市は港湾施設を持つ重要な地域とされていた。なぜならば工業地帯として、石油精製所、繊維工業、植物製油所、テトラエチール鉛の生産、軽工業、窯業等の工場ばかりでなく、ニッケルや銅の溶鉱炉などが設置されていた。さらに、四日市市は大都市名古屋市を補完する市でもあった。これらの施設・地域を守るためには、どうしても近郊に基地を築く必要があり、そのための条件に最適として選ばれたのが尾平の谷田山であった。

本土への空襲が激しくなるにつれて、基地を持つ尾平村の住民達は不安な思いを募らせる中、昭和20年6月18日の未明に、四日市市が大空襲を受け、一夜にして街は壊滅状態となり、多くの工場、人家の消失、さらに、大勢の人々の尊い命が失われた。だが、その時



谷田山から見た四日市市街地

なぜか谷田山の基地からは、何ら応戦することもないまま空襲は終わり、その基地の在り方に地元住民一同に大きな衝撃と不安を抱かせ、完全に軍への信頼を失墜させたのであった。

当時、地元の農家に於いては、兵舎に収容できない兵隊を下宿させていて、終戦と同時に古里に帰る兵隊の花嫁として、下宿の娘が村を出て行ったことも厳しい戦争の陰に咲いた微笑ましい一面でもあったという。

この基地は何の役にも立つことなく、不用の長物としてではあったが、基地であったという事実は永く地元の人々の間に語りつがれている。

その跡地は、造成され現在は美里ヶ丘団地となっている。